

◆司会

皆さまこんにちは。ただ今より、令和5年度千葉氏公開市民講座「千葉氏と浄土信仰」を開講いたします。私は本日の司会進行を務めさせていただきます、郷土博物館の八木澤と申します。よろしくお願いいたします。はじめに、千葉市立郷土博物館館長、天野よりごあいさつを申し上げます。

館長挨拶・趣旨説明 千葉市立郷土博物館 天野良介 館長

皆さまこんにちは。郷土博物館の館長を仰せついております天野と申します。最初のあいさつということですが、趣旨説明を併せて行ってほしいとのことですので、本日のお話のご講演の趣旨も、内容も含めましてお話をさせていただきますと思います。

まず、本日は多くの皆さま方においでいただきまして誠にありがとうございます。去る5月8日よりコロナウイルス感染症が5類相当に移行されたことに伴いまして、われわれの周辺でも日常生活が戻ってきているように感じられます。ここ3年間ほど、こうした行事、集まっての講演なども行えなかったり、行っても座席を1人ずつ人数を制限したり、なおかつ距離を取りながらという開催でございましたけれど、それに伴ってようやく本来あるべき姿で開会ができるようになりましたことを、われわれといたしましても本当にうれしく思っております。

さて、千葉氏（チバウジ）ですね、本来は千葉氏（チバシ）と言うべきなのでしょうが、千葉氏（チバシ）というと、どうしてもシティーの市と混同してしまいますので、正しくは千葉氏（チバシ）ですけれども、千葉氏（チバウジ）という用語を使ってまいりたいと思います。

その千葉氏が活躍したのが中世という時代になりますけれども、この中世という時代は宗教が非常に大きな力を有していた時代でございます。そして人々の生活、思想、文化に至るまで非常にさまざまな社会の面において強い影響を及ぼしていたと考えられております。とりわけ平安期からの末法思想の流行に伴い、阿弥陀如来による救いと極楽浄土への往生を願う浄土信仰というものが広まってまいります。特に武士と呼ばれる存在は、どうしても合戦に明け暮れて日々死というものと直面をする存在でございますので、武士の多くもこうした信仰を受容するようになってまいります。それは北斗七星や北極星を神格化した妙見信仰で知られる千葉氏もまた例外ではございませんでした。源頼朝による鎌倉幕府成立に貢献をいたしました千葉常胤の六男、そして東氏の祖となった胤頼は浄土宗の開祖法然上人に帰依し、その高弟となって「法阿」という法号まで頂いており、専修念仏を信仰しております。そして浄土宗三祖の然阿良忠という僧がおりますが、千葉一族の庇護の下、下総国の各地に寺院を開くなどして浄土宗を広めていくこととなります。

また、鎌倉末期の千葉宗家の当主千葉貞胤は、浄土信仰の一流である時宗、「時の宗」と書きますが、時宗を受容して、千葉に来迎寺（ライゴウジ）、来光寺（ライコウジ）と当初は言ったようですが、こちらを建立しているものであります。本寺は戦後、稲毛区轟町へ移転をしておりますけれども、もともとは中央区道場北が太平洋戦争まで寺院の所在地でございまして、布教の拠点である時宗の千葉道場がそこにあったことから道場という地名ができていたという由来の地でございまして、これ以来、千葉宗家は時宗を信仰しております。時宗寺院を菩提寺としております。来迎寺は江戸時代に浄土宗寺院に転じました。後に千葉宗家は本佐倉へ移りますけれども、佐倉にある海隣寺というお寺にも千葉氏歴代の墓塔がたくさん残っているということは、皆さま方もご存じかと存じます。

また、室町期の当主千葉満胤の子、あるいは系図によっては氏胤の子ということもありますけれども、その子の西誉（ユウヨ）上人は、後に徳川将軍家の菩提寺となる、現在東京都港区にございます増上寺の開山になっております。戦国期の当主千葉昌胤は、時宗の本山である当麻派の無量光寺、これは神奈川県相模原市のほうにございますけれども、藤沢にある有名な遊行寺、清浄光寺とはまた別の大本山ということになっているところがございますが、そちらから下総国を訪れました遊行上人に面会をしており、その後も交流をしていることが史料から分かっております。また、当主以外の千葉一族でも浄土宗に帰依する者も見られております。例えば小弓城

を拠点とした千葉一族の原氏も浄土宗の寺院の大巖寺を創建しているということが知られるように、浄土信仰との非常に継続的なつながりがこの千葉の地で千葉一族との関係において見て取れるということでございます。つまり、こうした千葉氏の長く広範な浄土信仰との関わりもまた、この下総の地の豊かな仏教文化というものが花開いた基盤となっているということは間違いのないものと思います。

そこで今年度の千葉氏公開市民講座では、千葉氏と浄土信仰との関係に焦点をあてました。そして仏教史、文化史の視点から千葉氏を考察して、宗教が人々の内面に深く根ざした中世という時代を、千葉氏の位置付けですとか、その果たした役割から明らかにしていきたいと考えます。そこで、そのための現在最適の講師と考えられます、前千葉県立中央博物館館長で、現在公益財団法人千葉県教育振興財団で理事長を務めていらっしゃる植野英夫先生をお招きいたしまして、この内容の講座をお願いした次第です。先生には、お忙しい中、快くこの講座をお引き受けいただきましたことを心より感謝申し上げている次第でございます。

併せまして、過日6月1日は「千葉開府の日」でございます。3年後、令和8年の6月1日は「千葉開府900年」という非常に記念すべき年をわれわれも迎えることになるわけです。こうした中で休憩を挟んで2時間の先生のご講演が、千葉氏の理解と関心とを高めていただく有意義な機会の学びの場となっていただけるとなりましたら、これに勝る喜びはございません。

以上、言葉整いませんが開会のあいさつとさせていただきますと存じます。今日一日何とぞよろしくお願いいたしますします。

講師紹介

◆司会

それでは、講師の植野英夫先生をご紹介します。

先生は1962年のお生まれです。茨城大学では、浄土真宗や時宗をはじめとする仏教史研究の第一人者、今井雅晴先生のもとで仏教史、文化史を中心とする中世史を学ばれました。大学卒業後は千葉県教育委員会に勤務し、県立大利根博物館、国立歴史民俗博物館、千葉県教育庁教育振興部文化財課などで、中世史、文化史の調査研究と文化財保護を担当されました。県立中央博物館の館長を経て、本年4月から文化財センターや房総のむらなどを擁する千葉県教育振興財団の理事長として、文化財の調査研究、保護、社会教育の振興に尽力されています。

研究テーマは、浄土信仰や密教をはじめとする中世仏教、仏教美術で、一貫して文化史の面から東国の中世史の解明に努めていらっしゃいます。主な論文としては『親鸞の水脈』7号に掲載の「房総半島中央部に伝わる浄土真宗史料」（2010年）、岩田書院から刊行された『中世東国論7 中世東国の社会と文化』に掲載された「千葉県銚子市・常燈寺薬師如来坐像の像内銘に関する考察」（2016年）などがあり、最新のご研究としては『千葉文華』46号の「成田市・龍正院における仁王造像銘札について」（2022年）がございます。

それでは先生、どうぞよろしくお願いいたします。

「千葉氏と浄土信仰」 植野 英夫氏

はじめに

皆さんこんにちは。今ご紹介いただきました植野と申します。先ほど5類に移行ということもありましたけれども、今日は大勢の方がいらっしゃいますので、念のためマスクをして話させていただきます。よろしくお願いいたします。

今日はレジュメを、横書きのものと「史料編」ということで縦書きのもの2種類を用意しております。前半はなるべくレジュメを中心に進めることになると思いますので、よろしくお願いいたします。

さて、今のNHKの大河ドラマで『どうする家康』というのをやっております。去年に引き続き東国ゆかりと

ということで、多分見てらっしゃる方も多いのではないかと思います。けれども、徳川家康の旗印に漢字でいろんな言葉が書いてあります。ご記憶の方いらっしゃいますでしょうか、「厭離穢土欣求浄土」という8文字の漢字が旗印に記載されております。あれは、今日お話しする、平安時代に日本の国内で編まれた『往生要集』という書物に出てくる言葉なんですね。「厭離穢土」というのは、現世というのは汚れてる世界であって、そこを離れて清らかな仏の住まう国、極楽浄土に行くんだと、そういう言葉でございます。「厭離穢土欣求浄土」については家康が、若いころ三河（愛知県）の大樹寺というお寺、今でも岡崎市にある大変大きなお寺でございますけども、その僧侶から頂いた言葉だというように伺っております。

その大樹寺を開いた宗派が浄土宗ということで、浄土宗そのものを開いたのが、先ほど天野館長からご紹介いただいた法然房源空というお坊さんですね。法然上人あるいは源空とよく呼ばれておりますけれども、浄土宗の開祖でございます。

今日「千葉氏と浄土信仰」ということでお話しせよということでしたが、浄土信仰というのは非常に幅広うございます。その中で特に浄土宗に関することを、今日は中心にお話しさせていただきます。先ほど天野館長から時宗ですとか浄土真宗のこともお話がございましたけども、そこまで話を広げますと時間がいくらあっても足りませんので、浄土宗ということでお話しさせていただきますのでよろしくお願いしたいと思います。

1 浄土信仰について

(1) 浄土の種類

まず浄土信仰の「浄土」なんですけれども、実は仏教では浄土はいっぱいあるんです。それがレジュメの最初のほうに書いてございますけども、今日お話しするのは阿弥陀如来の西方極楽浄土なんですけど、そのほかにも薬師如来の東方浄瑠璃浄土、釈迦仏の霊山浄土、弥勒菩薩の兜率浄土、毘盧遮那仏の蓮華蔵世界、観音菩薩の補陀落浄土、大日如来の密厳浄土ということで、いろんな浄土がございます。これ全て信仰する仏様がいらっしゃる国、そこに行くんだと、信仰の力によって、というようなことの浄土でございます。今回は、特に阿弥陀如来の西方極楽浄土について述べていきます。

(2) 末法思想（末代観）

仏教の中には特別な時代観がございます。ゴータマ・シッダールタ（釈迦）がインドに生まれたのは紀元前だいたい5世紀から4世紀あたりだといわれています。絶対年代にはいろんな説があって確定しておりません。釈迦がいたころは、ちゃんと法がこの世の中で生きていて、みんなに行き渡っていたと。しかし釈迦が亡くなった1000年間は、教え、そしてその教えを実践する人はいて悟りを開く人もあるという、「正法」の時代だというようにいわれております。正法の次の1000年間は「像法」といまして、教えと教えを実践する人はいるけども悟りを開く人がいないということでございます。そして正法、像法の次は「末法」ということで、これは教えだけが残っているけども、いかにわれわれ衆生が修行しても悟りを得ることができないという考え方です。このように特殊な時代観がございます。これも仏教とともに日本に伝わってきまして、我が国では永承7年、西暦でいうと1052年に末法に入ると信じられてきました。末法に入れば誰も成仏できないというかなり悲愴的な考えなんですけれども、その中でも念仏をすれば浄土に行けるんだといった教えが広まってきます。それが浄土教ということなんです。

(3) 浄土教

日本ではもともと法相宗とか律宗とか華嚴宗とかそういった宗派が平城京の時代、奈良時代にですね、ありましたけども、奈良時代の終わりに最澄が開いた天台宗、空海、弘法大師がお開きになった真言宗、この2宗が日本に伝わってきます。その中で天台宗は、比叡山を本山としましていろんな人たちの信仰を得まして日本の宗教の本流みたいな形になってくるんですね。その天台宗の中で末法という時代を迎えて、浄土教の教えがかなり広

がります。

この教えを最初に体系立てた方が、先ほど申し上げました『往生要集』を著しましたえしんそうずげんしん恵心僧都源信という方です。西暦985年に完成した『往生要集』なんですけれども、これは日本で初めて地獄とか極楽の世界を非常にビビッドに文字で書き起こした書物になります。今日は、私と同じぐらいのお歳、あるいは先輩方がたくさんいらっしゃいますので、どうなのでしょう、皆さんで子どものころお寺へ行って地獄絵図とか見せられたとかそういった記憶のある方はいらっしゃいますでしょうか。私などは、小さいころ寺に連れられてよく見せられたんですけれども、非常に衝撃的な、人体が切り裂かれたりとか、のこぎりで首を切られたりとか、そういった絵がありますけれども、そういった地獄の世界観を、非常に陰惨な状況を書き記したのがこの『往生要集』なんです。一方、欣求浄土ということで浄土のきらびやかさ、美しさ、清らかさ、そういったものも言葉でまとめたのもこの『往生要集』ということになります。

この『往生要集』は源信僧都が初めて日本の中でまとめて、これが浄土の考え方だというようなことで非常に日本中に普及します。そして源信僧都はこれを唐に送るんですね。「日本ではここまでこういうのを考えたんだ、どうだ」というかたちで唐の僧侶に評価をしてもらうような作業をしています。日本仏教にとっては非常に重要な著作になるんですけれども、これに基づいて地獄の恐ろしさ、浄土の素晴らしさといったものが日本の中に広がってまいります。

2 浄土宗と鎌倉武士

(1) 法然 (1133~1212)

そういった流れを受けまして平安時代の末期に、世の中はちょうど武士の世界になってくる、鎌倉時代になるときに新しい宗教がいろんなところで起こります。昔の教科書ですと「鎌倉新仏教」とかというような言葉でよくいわれました。法然、親鸞、日蓮、道元とか、そういった今につながる宗派を開いた開祖が誕生し活動し、そして新しい宗派を開いていく時代が鎌倉時代になります。最初に現れたのが法然でございます。

「浄土宗と鎌倉武士」というところに移りますけれども、法然上人はみまさか美作の国、今でいう岡山県に生まれた方で、13歳になって比叡山に登ります。そこで叡空という方の弟子になりまして、そこでいろんな修行をされまして、比叡山の教えに多少疑問を持ちながら修行しまして、承安5年(1175)に「せんじゆねんぶつ専修念仏」に開眼をするということでございます。建久9年(1198)に『せんちやくほんねんぶつしゆ選択本願念仏集』という書物を著します。これは「末法の世だからいくら修行しても仏になれないということなんだけれども、そういう中でも阿弥陀如来が立てた願によって、阿弥陀如来の他力によって浄土に行けるんだと、われわれ衆生の力じゃ行けないが、阿弥陀如来の願いによって往生できるんだ」というようなことを明確に著した書物でございます。ですから、どんな修行を積もうが、例えば造寺造仏、仏様をつくるとかお寺をつくるとか、そういったことをやらなくていいんだと、念仏さえ唱えればわれわれはみんな往生できるんですよということを説いたのがこの『選択本願念仏集』という書物でございます。

これが当時の世の中にあっては非常に破壊的な力を持っておりまして、いろんなところからこれは間違った教えだということで抗議の声がたくさん上がります。比叡山ですとか、当時の大和国、今の奈良県を支配した興福寺、そういったところから、この『選択本願念仏集』というのは極めて仏教から外れた教えだということ、朝廷を巻き込んでそういったものを弾圧しようという動きが出てきます。法然は建永2年(1207)にその弾圧を受けまして流罪になります。これを「建永の法難」と浄土宗では呼んでおります。土佐の国に流罪になります。法然が亡くなった後も、嘉禄2年(1237)に法然の墓が暴かれて遺骨を壊してしまえというような動きがあって、それをいろんな人たちが救うんですけれども、その一方で『選択本願念仏集』というのは当時出版されていましたが、その版木が焼却されるという「嘉禄の法難」というのが起きます。『選択本願念仏集』の版木焼却というのは日本で初めての「焚書坑儒」といいますか、そういった重い事件になります。そして嘉禄2年のときに、法然の茶毘を守ろうとしたいろんな武士がおります。その中に先ほど館長がおっしゃった千葉常胤の六男、東胤頼がおられます。

(2) 法然帰依の鎌倉武士

『法然上人絵伝』の巻四十二の絵をご覧ください。ここに東胤頼が描かれています [小松茂美編『続日本の絵巻 2 法然上人絵伝 下』中央公論社、1990年、48~49ページ参照]。この『法然上人絵伝』というのは全部で四十八巻の絵巻で、日本最大の絵巻になります。14世紀の初め、法然が亡くなった約100年後に制作された絵巻なんですけれども、法然の弟子と交わした手紙の写しですとか、いろんな聞き取りなんかを全部まとめてつくられた、大変大部なものでございます。その中に法然に心を寄せた武家のこともいろいろ書かれております。その中に次のような一節が出てきます。これを絵巻の詞書で読んでみようと思います。

3 法然の門弟となった千葉氏

(1) 相馬師常

千葉県付近に限りますと、下総国では結城朝光上野入道日阿、千葉六郎大夫入道法阿という法然の門弟がおります。そして法然の門弟となった千葉氏の中で、『法然上人絵伝』の中には出てこないんですけれども、相馬師常という方もいわゆる念仏者として知られております。それについては【史料1】に書いてありますので、後でご覧いただければと思います。

(2) 東胤頼

【史料2 東胤頼】と書いてあるところをご覧くださいいただければと思います。

【史料2 東胤頼】・『法然上人行状絵図』第四十二 (四十八巻・勅集御伝)

西郊にわたしたてまつるに、路次の障難ををそれて、宇都宮の弥三郎入道蓮生、塩谷の入道信生、千葉の六郎大夫入道法阿、渋谷の七郎入道道遍、頓宮の兵衛入道西仏等、出家の身なりといへども法衣のうへに兵仗を帯して、御ともに参じければ、家子郎党等などあひしたがひける程に、軍兵濟濟として前後にかこめり。遺弟以下御ともに参ずる人一千余人、おのおの涙をながしかなしみをぞふくみけり

とあります。ごめんなさい、この絵と関係するのは【史料3】でした。これを続けて読みます。

【史料3 東胤頼】・『法然上人行状絵図』第四十三

さて、姉小路、白川はらいどの殿のつじ辻子といふ所に、妹あまぎみの尼公の侍ける、いほりのうしろに、ひさしをさして、身ひとつおさむるほどに、わらをもちてゆひまはして、そのうちにこもりゐて、かみの衣を着し、食時便利のほかは、一向に念仏す。小土器六をならべて、香をもり火をけさず、とりうつしとりうつして、念仏しけり。ひとにも対面せず、生涯は別時なりけり。ついに(1204)元久元年の冬、臨終正念にして、端坐合掌しこしゅう高声念仏すること数遍、念仏のこえにていきたえぬ。そのあたり五六町のうち、いきまうふんぶく異香芬馥す、室のうち、三年までかうばしかりけるとなむ。東山延年寺のうゑの山に葬す。着するところのかみの衣、異香はなはだし、たづねいたるひと、面面にわかちとりにけり。終焉のとき、貴賤男女はしりあつまりて、結縁しけるなかに、大番の武士、千葉の六郎太夫胤頼これを見て、たちまちに発心出家す。上人給仕の弟子法阿弥陀仏これなり

とあります。胤頼のところには傍線を引いておきましたけれども、これはどういうことかといいますと、最初にたまたま大番役で京都に上っていた御家人である千葉の六郎胤頼が、ある方の出家の様子を見たということで [前掲『続日本の絵巻 2 法然上人絵伝 下』、59ページ参照]。ちょうどこの詞書に書いてあるように、すだれのようなものを回して区画をつくって端坐合掌して念仏をする人がいます。掛け軸が描いてありますけども、これは「阿弥陀如来の来迎図」といいまして、雲に乗っているんですね、雲に乗った阿弥陀如来が後光を放ちな

がら西の空からやってくると。まさにこの方が往生するに当たってお迎えに来るんだというようなことを表す絵でございます。この端坐合掌している者を、みんなまたこれを拝んでいると。その中に東胤頼がいて、この方の往生を見ていて自分にもわかeni発心したというようなことが書いてあります。

この往生のところにいろいろな言葉が出てきますけれども、どうなったら往生できたのかというようなことについて、実は中世の文学とか当時の史料には必ず出てくる様々な要素があります。

その一つが、まずにおい。素晴らしいにおいがするということ。あと、紫雲たなびくといいますが、紫の雲が辺りに漂うとか、その素晴らしいにおいもずっと残ってるというようなことがありまして、「うう、苦しい、助けてくれ」といった人がそのままバタツとなったときには、大体そういう場合には往生していないということになっちゃうんですね。でも、合掌して静かに息を引き取るというんでしょうか、そのときにすてきなにおいがあるとか、紫雲がたなびくとか、そういったことがあると、この人は往生したとされ、それが往生のしるしになる。そのことがまさにここに書いてありまして、「異香芬馥す」とか、3年たってもそのにおいは消えなかったとか、この方が着ている紙の衣もおいが消えないので、みんなそれを分けてもらっていたとか、そういったことが書いてあります。

先に読んでしまいました【史料2】なんですけれども、嘉禄の法難のときに法然上人の遺骨が掘り返されようとするときに、それを止めようとして法然上人の弟子であった、特に御家人たちが守ろうというようなところを描いた絵が『法然上人行状絵図』第四十二になります。輿に乗っているのが法然上人の遺骨です。この列の後ろにこの方たちが来るんですけれども、武士と思われる方たちが従っています。詞書では「法衣のうへに兵仗を帯して」とありますから、普通の法衣の上に甲冑を着るとか刀を佩くとかっていうようなことになるんですけれども、家臣たちは連れていますが、この方たちはまだ甲冑とかをつけていません。しかし、ほかの絵には実は甲冑をつけているものがあります。これが『拾遺古徳伝』という絵巻なのですが、これを見ていただければ、白い衣の上に腹巻をしているのが分かりますでしょうか。こういった形で法然上人の遺骨を守ろうとする人たちがいたということでございます。

この遺骨を守っている武士たちの面々というのは、どういう人たちなのかといいますと、レジュメの1ページの終わりから2ページ目の「法然帰依の鎌倉武士」を見ていただきたいんですけれども、『法然上人絵伝』とか法然と取り交わしたいろんな手紙ですね、そこに登場する者で、これだけの人間がいます。

(3) 帰依の理由

次に、この武士たちが専修念仏をなぜ信仰したのかと、その辺のところを考えていきたいと思います。比較的分かりやすい例を取り上げます。津戸為守、熊谷直実、甘糟忠綱などが非常に分かりやすいので、これについて紹介していきたいと思います。【史料4】でございますけれども、傍線を引いたところだけご覧ください。

【史料4】 津戸三郎為守 ・『法然上人行状絵図』第二十八

(前略) 合戦度度の罪を懺悔し、念仏往生の道をうけたまはりてのちは、但信称名の行者となりにければ、(中略)ある人、熊谷の入道、津戸の三郎は無智のものにて、余行かなひがたければこそ、念仏ばかりをばすゝめ給らめ。有智の人には、かならずしも念仏にはかぎるべからずと申しけるを、為守つたえきゝて、上人にたづね申しけるついでに、条々の不審を申しけれり。上人の御返事云、(中略)極たるひが事に候。そのゆへは、念仏の行はもとより有智無智にかぎらず、弥陀のむかしちかひ給ひし本願も、あまねく一切衆生のためなり。

云々とあります。つまり、侍は合戦を何回もやって、人を傷つけたりとか殺生したりしていると。ただ念仏すれば往生に行けるといっても、本当なんだろうかと。熊谷の入道とか津戸三郎は武士であって教養がない、無知であると。例えば仏をつくるとか寺をつくるとか、そういった余行はとてもできない。念仏ばかりを勧められるんだけれども、本当に往生できるのだろうか、というような疑問を發しています。

これに対して上人のお返事いわく、この上人とは法然上人ですね、法然上人が手紙の中でこのように教えてくださったと。そのように疑問に思うことは「極めたる僻事に候。そのゆへは、念仏の行はもとより有智無智にかぎらず、弥陀のむかしちかひ給ひし本願も、あまねく一切衆生のためなり。無智のためには念仏を願じ、有智のためには余の深き行を願じたまうとなし。」ということになっています。念仏の行は、もとより教養がある、教養がないとかに関係ないんだと。

「弥陀のむかしちかひ給ひし本願」ということは、これは阿弥陀如来というのは最初から阿弥陀如来ではなくて、昔は法蔵菩薩とってたんです。仏教では、人々が出家することで一つはまず菩薩になるんですね。観音ですとか地藏など、あれも菩薩です。まだ完全な悟りには至ってないんです。それがもっと修行を重ねることによって、最終的には悟りを得ると如来になるんです。いわゆる仏になると。それが釈迦如来とか阿弥陀如来とか大日如来とか、この上なく本当の悟りにたどり着いた人たちを如来といいます。ところが阿弥陀如来がまだ阿弥陀如来になる前、法蔵菩薩だったころに願を四十八立てるんですね。四十八の願いを立てます。「世界中の衆生が救われなければ私は浄土に行かない」とか、「どんな悪行をした人でも極楽浄土に行けなければ私は成仏しない」とか、大乘仏教の教えとして「世界中の人たちが幸せにならなければ本当の幸せはやってこない」というような思想に基づいた願いなんです。「弥陀のむかしちかひ給ひし本願も、あまねく一切衆生のため」であって、われわれ無知の者も往生できるんだという、既に阿弥陀の教えに書いてあるんだと。だからあなたたちの疑問は間違ってるんですよというようなことを答えています。

次に、熊谷次郎直実の【史料5】ですけれども、傍線のところだけ読んでみます。

【史料5】 熊谷次郎直実 ・『法然上人行状絵図』第二十七

(前略) 手足をもきり命をもすててぞ、後生はたすからむずるとぞうけ給はらむずらんと、存ずるところに、ただ念仏だにも申せば往生はするぞと、やすやすと仰をかふり侍れば、あまりにうれしくて、なかれ侍るよしをぞ申しける。

云々とありますけども、「合戦のたびに手足を切ったりとか、命も捨てたりとか、いろんなことをやってきても、ただそんな自分でも念仏だけ申せば往生できるという仰せを頂いて涙が流れてしまった」と、そのようなことが書いてあります。その少し後ですね、「ふた心なき専修の行者にて、ひさしく上人につかへたてまつりけり」と、「二心なく専修念仏の行者として法然上人に仕えたんだ」というようなことが書いてございます。合戦のときに殺生をすとかは武士の本来の職業みたいなものですが、それに基づいて自分たちが本当に成仏できるかという、そういった悩みが深いということがあり、あとは都の公家とは違って教養もない、そういった者も本当に往生できるんだろうかと、経典も読めないけれどもできるんだろうかというような悩みというのが、今説明した中で伝わってくるかと思います。

次の【史料6】ですけれども、これは甘糟忠綱の件ですね。

【史料6】『法然上人行状絵図』第二十六

(前略) 忠綱武勇の家にむまれて、弓箭の道にたづさはる。すゝみては父祖が遺塵をうしなはず、しりぞきては子孫の後栄をのこさむがために、敵をふさぎ身をすてば、悪心熾盛にして願念発起しがたし。もし今生のかりなるいはれをおもひ、往生のはげむべきことよりはをわすれずは、かへりて敵のためにとりこにせられなむ。ながく臆病の名をとどめて、忽に譜代の跡をうしなひつべし。

ここで忠綱が悩んでいるのは、先祖代々の土地というか家を引き継いでいる、それを失うことはできないと。もしそれを全部捨てて去ってしまえば、子孫に何も残せなくなってしまうと。念仏ばかりしては、かえって敵に捕らわれてしまって捕虜の身になってしまうと。たちまちに譜代の遺跡を失うことになってしまう。そういっ

た悩みを持っていて、「弓箭の稼業もすてず、往生の素意をもとぐる道侍れば、ねがはくは御一言をうけ給はらんと申しければ」、つまり、こういった「弓箭の道、武士としての家、財産、名誉、そういったものを捨てないで、なおかつ往生もしたいという、その道を遂げる方法はあるだろうか」ということを法然上人に尋ねると、法然が言います。

上人おほせられる様、弥陀の本願は機の善悪をいはず、行の多少を論ぜず、身の浄不浄をえらばず、時処諸縁をきはざれば、死の縁によるべからず。罪人は罪人ながら、名号をとなへて往生す。これ本願の不思議なり。弓箭の家にむまれたる人、たとひ軍陣にたゝかひ、命をうしなうとも、念仏せば本願に乘じ来迎にあづからむ事、ゆめゝ疑べからずと、こまかにさづけ給ければ、不審ひらけ侍りぬ。

このように書いてあります。こういった法然の教えによって、武士の家に生まれて、本当は念仏三昧して往生したいんだけどもそればかりは言っていられない、武士の名誉もあるし家柄のこともあるし、そういったことも捨てずに往生できるだろうかという疑問に対して、法然はこのように答えております。

そして藺田太郎成家往生の絵をご覧ください [小松茂美編『続日本の絵巻 2 法然上人絵伝 中』中央公論社、1990年、70・71ページ参照]。今の群馬県、上野国ですね、この場合は住まいのところにこの人が合掌して念仏を唱えてますけれど、この前のお堂のところに阿弥陀様がいらっしゃいます。ここから光が注がれて、この人が往生するというのを迎えに来ようというさまですね。このように見ますと、武士の居宅の中に阿弥陀堂があるというようなこと、かなり阿弥陀様に対する信仰が厚いということがよく分かります。

熊谷直実の場合では、熊谷直実は今ここにいまして座っております [前掲『続日本の絵巻 2 法然上人絵伝 中』、83ページ参照]。周りに黒い袈裟を着た同じ念仏者がいたりして、多分家臣とか家族なんでしょうか、見守っています。ここにもやはり阿弥陀の画像かな、これが置いてありまして、合掌してひたすら念仏を唱えて往生するところという絵が描かれています。上のほう、ちょっと切れてはいますが、雲があつてまさに素晴らしい香りのする雲がたなびいてくるとか、そういったのがこの絵巻の中で表現されております。このように念仏を信仰した武士たちが、いろんところで念仏弘通に関する善行、^{さぜん}作善に^{けちえん}結縁をすることがあります。

4 作善への結縁

(1) 當麻曼荼羅厨子修理

レジュメですと2ページ目の中ほど、作善への結縁というところをご覧ください。本来は念仏だけすれば往生できるっていうんですけども、それまでの平安時代以来の長い伝統があつて、仏を造るとか、仏を拝むとか、寺を造るとか、これらがこれまで往生するためには大事だといわれた行です。そういったものを全部捨て去ることはなかなかできないんですね。専修念仏者なんだけれども、そういったものがあればそれに結縁して、さらに自分の往生の可能性を高めるといふか、そういうことをされます。その一つとして【史料8】で挙げましたのが、當麻曼荼羅厨子修理ということなんです。「當麻曼荼羅」というのは奈良県に當麻寺(葛城市)というお寺があつて、そこに中将姫という方が蓮から糸を取って織り上げた當麻曼荼羅というのがあります。この當麻曼荼羅は浄土の美しさを刺繍でつくった曼荼羅なんですけれども、現物は非常に大きな織物です。曼荼羅自体がおよそ4メートル四方の大きさがあります。そんな大きいものですから、それを入れておく厨子は非常に大きなものになりますね。その厨子の扉絵、仁治3年(1242)にこの扉を修理するんですけども、そのときにいろんな方が寄付をされるんですね。それが結縁なんです。

その中に千葉氏の関係の人がおりまして、左衛門尉平胤景、左側に描かれているんですけども、扉のところの銘文だけ【史料8】として掲載し、四角で囲ってありますのでご確認ください。

このときの當麻曼荼羅の修理はかなり大規模でして、当時の天皇ですとか、鎌倉幕府の将軍の名前とか、いろん方々の名が出てきますけれども、その中に千葉氏ではこの平胤景の名前が出てきます。胤景は、常胤、胤

頼、胤重、胤方、胤景ということで、胤頼のひ孫になりますね。この方です。浄土の美しさを描いた當麻曼荼羅を納めておく厨子の扉ですので、当然ここも蓮池といますか、蓮の池とそこに咲き誇るハスの花、そして上からは花びら、散華ですね、仏が舞い降りる様子を示すような絵柄が描かれております。これに結縁しております。

(2) 源智発願阿弥陀如来造像（浄土宗（旧玉桂寺）所蔵）

そしてもう一つ有名なものとして、仏像、造仏に対する結縁なんですけれども、これについては【史料7】になります。この阿弥陀如来は、もともとは滋賀県の甲賀市にあった玉桂寺というお寺にあったものです。その玉桂寺は、現在は真言宗ですけれども、昭和48年（1973）にこれが修理されたときに、中からたくさんの紙に書かれた史料が出てきました。像内文書といいますけれども、それを広げたら、それまでの浄土宗の歴史を覆すようないろんな発見物がたくさんありまして、現在はこの仏様は浄土宗の所蔵になっています。そこに千葉氏関係の人がかなり出てきます。レジュメの2ページから3ページにかけて表が載っていますけれども、この仏様は法然の弟子の勢観房源智という方が、法然の一周忌に合わせて造像した阿弥陀如来です。

その中に源智自筆の願文^{がんもん}もあるんですけども、そのほかに約4万6000人の交名^{きょうみょう}、交名というのは名簿ですね、約4万6000人の方々がこの阿弥陀仏をつくるに当たって喜捨したということで、名前が書かれてあります。その中の名前はかなり多くが法名で書かれているので同定が難しいんですけども、これまでこの御家人に関しての同定で、峰岸純夫さんと野口実さんという方が取り組まれておりまして、11人が千葉氏関係者だろうといわれております。千葉胤正、常胤、秀胤、重胤、ずっと来て相馬ということで、11人おります。

法然の一周忌の仏様をつくるのに結縁するということは当然、法然上人となんらかのゆかりがなくては結縁できませんので、あるいは自分は心から専修念仏者ではないかもしれないけれども、往生のよすがとしてこれに結縁したということも十分考えられます。念仏者としての振る舞いがここでしか登場しないという方がほとんどですので、正確なところはその辺分かりません。

この中で一つ特徴的なのが、3番に書かれてあります寛秀ですね。栗原禅師と書いてあります。レジュメにあるように、この寛秀を千葉胤正の庶子と比定したのは峰岸純夫さんと野口実さんです。野口さんは、栗原というのが栗原郷のことで、現在の船橋市内であると比定されております。

次に、栗原郷というのは実は浄土宗と浄土真宗の江戸時代の史料に出てくるんですね。どういうことかと簡単に申しますと、法然にはいろんな弟子がいて、「私が教わった教えはこれだ」、「いや、私が教わったのはこっちだ」ということで、自分は本当の教えを受けたと分派してしまうんですね。これは宗教でよくありがちなことなんですけれども、私がより正しい法然上人の教えを受けているということで、いろんな派ができるんですけれども、その中に成覚房幸西という方がおります。この方は「一念義」ということを主張した方です。どういうことかといいますと、「阿弥陀如来が願を立ててわれわれを救ってくださるというんですから、念仏は1回すれば往生できるんだと、2回も3回もやらなくていいんだ」というのが一念義で、極端な発想といえます。法然は決してそういう教えはしてないんですけども、法然の教えを突き詰めればそういう考えも成り立つということで、この一念義というのを広めるんですけども、この方は朝廷・幕府からやはり非常に危険だということで流罪になります。江戸時代の史料に、成覚房幸西は栗原郷に逃れて、ここで教えを説いていたというようなことが出てきます。そんなことあり得ないだろうというようなことで、私もずっとそのように思っていたんですけども、今回この講演をするに当たりまして、後でご紹介しますが、千葉氏から出てくる、増上寺を開いた聖聡という方がいるんですけど、その方の書いた著作を見ていたら、実は成覚房幸西のことを最初に取り上げたのは聖聡なんです。『五重拾遺鈔』というところに出てきます。だいぶ後なんですけれども、【史料16】になります。

『五重拾遺鈔 中巻』のところですが、「成覚房等とは、彼の門徒を放たれるにより、下州栗原の郷に移住して道俗を勧む。今に彼の門人之あり。云々」と書いてあります。永享11年（1439）の成立、つまり法然上人が亡くなった後、200年後ぐらいでしょうか、そのころにはもしかすると成覚房幸西というのは船橋市の栗原郷にいたということが既に伝説になっているか、あるいはそういう伝承が何かしらあったのかということがうかがわせ

る記事でございます。これは、今まで近世の史料にだけしか登場してこなかったとされていましたが、実は室町時代には既に登場していることが分かりましたので、ここでご紹介させていただきます。

この後、法然上人の話が終わりまして、浄土宗の第三祖の然阿良忠の下総の国での伝道の様子ですとか、それに関する文化遺産についてお話ししたいと思いますので、ここで休憩を入れさせていただきたいと思います。

【休憩】

5 然阿良忠の房総伝道

(1) 然阿良忠 (1199~1287)

それではレジュメの3ページの中ほどですね、然阿良忠の房総伝道というところをご覧ください。法然上人が浄土宗を開いたということをお話し申し上げましたけども、その法然の教えがいろんなところに広がっていきます。その弟子の一人に聖光房弁長という方がいます。この方は九州にいたんですけども、九州のほうで開いた法然の教えが鎮西義というふうにいわれております。現在の浄土宗は基本的に鎮西義が本流になっています。石見国、現在の島根県に生まれた然阿良忠ですけども、聖光房弁長の弟子になって、今度は自分が法然の教えを広げようと全国に伝道に出かけます。鎌倉時代の中ごろですけども、千葉県に来まして約10年以上伝道を行いました。

房総を離れた後、鎌倉、京都、そういったところで伝道を行います。現在では浄土宗の第三祖と数えられておりまして、有名なものでは鎌倉材木座の光明寺、ここの開祖になっております。

今、鎌倉の材木座の光明寺にあります良忠上人像という坐像は、室町時代の前期ごろに造像されたといわれております。左手には軸、経巻を持って、右手には筆を持っております。記主禪師といわれるようにたくさんの著作を残しました。法然上人の後、浄土宗の宗義としての体裁といいますか、基本的なものを形作ったのはこの良忠上人になります。

(2) 千葉県内の良忠開山寺院

この良忠が房総に来るんですけども、レジュメに表で示しましたように、然阿良忠の開山あるいは然阿良忠のゆかりのある寺というのが全部で14カ寺あります。この中にはもちろん無住のお寺もあったり、廃寺になったりしているお寺もありますけれども、こういった寺院があります。基本的には匝瑳、海上というんでしょうか、東下総のほうに集中しております。南の上総国、安房国にも若干の遺例はありますが、こういった寺がございます。

(3) 良忠上人と千葉氏

良忠はなぜ千葉に来たのかということなんですけれども、レジュメの4ページをご覧ください。良忠上人と千葉氏ですね。良忠は弁長から法を受けた後、暦仁元年(1238)年から約10年、生まれた国の石見国にとどまっております。その後、宝治2年(1248)に上洛し、翌年に信濃(長野県)の善光寺を經由して房総に入ってきます。石見国から東国に来る契機についてはこれまでまったく分からなかったんですけども、最近の研究で、当時石見国の守護だった相馬師常の孫胤綱が関わっているのではないかという説がいわれております。つまり、相馬胤綱からの依頼で、一族の追善を千葉に来てやってくれないかという可能性が指摘されております。これはそういった証拠があるというわけではなくて、状況証拠としてそのようにいわれております。何もゆかりがなく、石見国にいた人がいきなり千葉に来るっていうのは確かに解せないところがあるんですけども、法然の弟子になった東胤頼の関係なのかなとかいろんなことも考えられます。しかし、まったく一次的な史料はなかったんですが、房総に来る前に石見国にいたということは確認できますので、そこでなんらかのきっかけが生まれたということを考えますと、相馬胤綱の勧めというのも一つ考慮してもいいのかなと考えております。では、千葉に来て良忠

がどんな教えを説いたのかというようなことを考えてみたいと思います。

①千葉氏の願いと良忠の教え

良忠は千葉に来て、まずいろいろな書物を執筆します。その最初の執筆が、レジュメ 4 ページにあります『浄土大意鈔』というものです。

ア 『浄土大意鈔』【史料 9】

建長 2 年（1250）には成立したといわれている書物として、人が臨終するときの善知識の必要性、念死念仏の重要性を説いた書物です。善知識というのは、お坊さんが亡くなる方のそばにいて、ちゃんと往生できるように導いてくださる人ですね。その方がいれば間違いなく往生できるように平安時代の頃いわれていたんですけども、法然は「善知識は必要ない」とまで言っているんです。そういう史料もあるんです。ですから法然の教えとこの辺はちょっと違うのかもかもしれませんが、往生するときに本当に苦しまずにあの世に行きたいんだというようなときに「善知識が必要だ」と説いたということは、逆にそういった教えを求めたがっている人たちが千葉にいたということの表れでもあろうかと思えます。念死念仏の重要性、これはまさに臨終するその瞬間の念仏こそが大事だというような教えでございます。これは現在の香取市、昔の小見川町ですね、浄福寺で記されたといわれておまして、千葉氏の粟飯原胤秀または木内胤貞に説いたといわれている書物でございます。

イ 『浄土宗行者用意問答』（正嘉 2 年（1258）成立）

もう一つ良忠の著書に『浄土宗行者用意問答』【史料 10】というのがあります。これは荒見弥四郎のために書いたといわれている書物です。【史料 10】を見ていきたいと思えますけれども、二つ柱がありますが、後半のほう「十三造罪往生の事」と書いてあるところを読み下してみたいと思えます。

「問うて云わく、罪業は悪因と我が心にも存知ながら、物を殺す徒も念仏だに申さば往生を遂ぐべきか、いかん」。罪深い行為をしていることは往生の妨げになることは知っているけれども、それでも往生できるんだろうかということですね。

「答えて云わく、造罪念仏の者の往生を遂げたる因縁、余多候。但し、それを憑んで恣ならんは、既にこれ邪見なり」と。罪を犯す者は、念仏で間違いなく往生できるということはたくさん例があるけども、ただ、それを知っていながらわざと罪を犯すことは駄目だよというようなことを答えております。

やはりここでも先ほど見たように、法然を信じた東国の御家人たちが、武家である、殺生をする、合戦をしなくちゃいけない、それでも往生できるのかという同じ悩みがここに書かれていたということが分かると思えます。浄土宗の史料はほとんど漢字なんですね。絵巻なんかですと平仮名も入ってくるんですけども、ほとんど漢字です。これは引用文献にも挙げましたけれど、『浄土宗全書』から全部引用してきておりますので、関心のある方はご覧いただきたいと思えます。

ウ 『選択伝弘決疑鈔』（建長 6 年（1254）成立）

次に、やはり千葉にいた段階で著した書物で『選択伝弘決疑鈔』【史料 11】というのがあります。傍線を引いてありますけれど、この史料に登場する「賓客」というのは鐫木胤定だというように弟子の良心の書物で残されていますので、この方に問いた教えだということが分かります。

エ 『決答授手印疑問鈔』（康元 2 年（1257）成立）

その隣に『決答授手印疑問鈔』【史料 12】というのがありますけれども、ここに「上総周東に在阿弥陀仏と云う者有り」と書いてあります。上総周東というのは今の君津辺りのことをいうんですが、その在阿弥陀仏という方からの問い合わせでこの書物を書いたということが書いてあります。この在阿弥陀仏については浄土宗の中では鐫木胤定、鐫木胤定も在阿というんですけども、その者ではないかといわれております。

ただ、もう一つ史料がありまして、先ほどの「千葉県内の良忠開山寺院」という表の 14 番に三経寺というお寺があります。君津市の市宿です。ここには在阿が開いた寺だという伝承を残しておまして、江戸時代には「在阿講」といって在阿上人を褒めたたえるような講も結成されたということが江戸時代の日記の史料によって分かりましたので、もしかすると在阿弥陀仏というのは鐫木胤定とはまた別な在阿である可能性もあります。

② 良忠と千葉氏との不和

このように千葉に来ていろんな武家と付き合うんですけども、鏑木胤定ですとか荒見弥四郎ですとか、いろいろ史料に出てきます。さらに在阿弥陀仏とか。いずれも千葉氏の本宗家ではないんですね。どちらかというところ中小豪族といいましょうか、田舎の者で、良忠はその者たちの悩みに寄り添っていろんな教えを説いてるんですけども、そのやりとりの中でいろんないざこざがありまして、結局は仲たがいを下総国を去ってしまいます。その辺を赤裸々に書いてある史料がありますのでそれをご紹介しますと思います。良心撰『授手印決答受決鈔』(正応6年(1293)成立)【史料13】ですけども、漢字ばかりで嫌になっちゃうかもしれませんし、これを全部読んでいくと頭も疲れますので、これを意識した方がいますのでそれをレジュメに引用してあります。レジュメ5ページの中ほどですね。【史料13】に付した下向きの三角印からのところですよ。大橋俊雄という浄土宗学者ですね、最後は能化までやるんですけども、この方が意識されたところを引用してありますので読んでみたいと思います。当時良忠が千葉に来て武士とどんなやりとりをして、なぜ仲たがいで千葉を去ってしまったのかというようなことを書いてある文章です。これは椎名胤光という、昔の八日市場の辺りを基盤にしていた武家なんですけれども、その椎名と良忠上人との問答です。

椎名：私は微禄の身ですが、お上人を養ってあげることができるのは誠に光栄なことです。

上人：いや、私は入道殿から扶養されたとは身に覚えがありません。

椎名：とんでもないことです。お堂一宇と水田一町を差し上げたではありませんか。それでも扶養されたことがないとおっしゃるのですか。

上人：この家にしても田畑にしても、全てお金を出して買い求めたものです。決してそなたからもらったものではありません。

椎名：そのようなことはないでしょう。私から買ったというならば、何年何月にお金をくたされましたか。

上人：その時々用途に従って何貫文・何百文もほしいと言われるままに差し上げたのは、家や田畑の代金ではなかったのですか。貸したのなら返してもらうのが当然ですが、返してはくれないはずですよ。

椎名：私は病気がちで痩せている身ですが、たびたび鎌倉に上下しています。それを哀れんでお使いくださいと用立ててくださったのではありませんか。こうしていただいたお金を、家や田畑の代金だとは考えていません。

上人：私は沙門であり、貧しく縁者はおりません。どうして身命を投げ出してまで、所領を知行している地頭に、お使いくださいとお金を出す必要がありましょうか。そなたは借金した本心は家や田畑を売るためだったのではないのですか。今になって売った覚えがないというのはもってのほか。

というようなことが書いてあります。建物1棟、水田1町、決してそんなに大きな財産ではありませんが、それを巡って両者の認識の違いが出てあります。これを受けて最後のほうなんですけれども、傍線を引いてあります。「田舎の人は盗人なり」と。良忠上人はやっぱり相当ショックだったみたいです。

椎名胤光の話が出ていますけれども、その後ずっと荒見弥四郎とのやりとりも出てくるんですね。このときも荒見弥四郎は、1町5反の田を良忠上人に寄進し、なおかついろんな坊を建てるために3町の田も寄進しますというようなことを言っていたんですが、一向に寄進がない。これどうしたことかと言ったら、ある方が教えてくれたのは、寄進する方たちをお招きしてごちそうを振る舞わないと、そういうのは寄進してもらえないんだというようなことで、しょうがないから良忠上人はごちそうをいろいろ用意して、お招きして飲み食いをさせるんですけども一向に寄進がないといったときに、そんなことは約束した覚えがないと言われて、結局すごく鎌倉に帰るんですが、そのときに「田舎の人は盗人なり」というような言葉で返しております。もともと中小豪族の中で、本来はそこで寄進を得て、いろんなところを拠点にして、またいろんな伝道に行けたんでしょうけども、そうはならなかったというようなことでございます。

その後なんですけれども、ここに文言がずっと続くんですけども、鎌倉に行く話があります。「大仏浄光聖に遇い

て、浄光聖がいわく」云々とありますけども、ここをちょっと覚えておいていただきたいなと思います。後でまたご説明したいと思いますので。

ただ、先ほどの意識の話でもあった通り、良忠上人はとにかくこの千葉に来ていろんな書物を書いていると。あと、いろんな講義をして、それに弟子が何人が聞いているとか、108人いるとか、いろいろなことが出てくるんですけども。また、荒見弥四郎とか椎名胤光にお金を差し上げたり、ごちそうを振る舞ったりしているということがあります。そのお金はどこから出たんだろうということが一つ分からないんですけども、それについてこう考えたほうがいいのではないかなというように後でご説明したいと思います。

そんなわけで良忠上人は、海匠、海上郡と匝瑳郡を中心に廻るんですけども、こうして県南も含めていろんなところへ行って講義をしたりとか著作物を著したりする活動をしますけども、最終的には千葉県を去ってしまいます。

6 西誉聖聡～千葉氏からの浄土宗高僧

その後、浄土宗と千葉氏の関わりというのはしばらく途絶えるんですが、最初に申し上げた増上寺を開いた聖聡が出てきます。レジュメの6ページをご覧ください。時代は南北朝になりますけども、聖聡は浄土宗の史料では千葉氏胤の子で、満胤の弟だといわれています。子どものときには徳寿丸、元服して胤明、9歳になって出家し、最初は明見寺、これは浄土宗の史料に出ている言葉ですけども、ここで勉強する。明見寺は妙見寺（金剛授寺尊光院、現在の千葉神社）のことだと思います。そして茨城県常総市の水海道に弘経寺くきょうじという大変大きなお寺があるんですが、その前身の横曾根談義所しやうげいで聖岡という方に帰依をして、聖岡から五重相伝を受けて浄土宗の宗義を確立したといわれております。浄土宗の八祖に数えられており、増上寺の開山です。また、満胤の次男で後に聖聡の弟子となる酉仰ゆうこうという方がいるんですが、この方が増上寺二世になります。しかし、この酉仰については千葉氏のいろんな系図では出てきません。浄土宗だけが伝えている人物になります。

聖聡も大部な書物を残すんですけども、講演の冒頭に申し上げました「厭離穢土欣求浄土」に関わる『厭穢えんたい欣浄こんじやう鈔』という書物を応永28年（1421）に著すんですが、それと『名号万徳鈔』という書物を聖聡は著すけれども、この二つの書物は「生阿禅門」「生阿弥陀仏」からの依頼によって撰述したと執筆の動機を書いております。

これについては近年になりまして、国文学の上野麻美さんが「生阿禅門というのは千葉満胤の家人で、中村弥六入道生阿ではないか」と唱えています。中村生阿というのは中村胤幹ともいいまして、香取神宮と千葉氏との間に起きた「応安の争論」において香取神宮の土地を横領する地頭として史料に登場する大変有名な武士でございます。上野さんの説は近年出たばかりで、まだどなたも論評はしていませんけれども、生阿が千葉氏の本宗家と香取神宮とのやりとりの中で登場する、当時ある程度の力のあった武士だということは分かっております。その方の求めによって、この書物を書いたということは十分あり得ることだと思います。もともと聖聡は氏胤の息子でもありますから、そういったことを考えると、然阿良忠以来の浄土宗とのつながりが少しでもまだ残っていたのかなというようなことは考えられるかと思えます。聖聡は増上寺に掛け軸になっている肖像画が伝わっていますが、非常に学問が好きで一生懸命書いてらっしゃる様子がよく分かるようなお姿として描かれております。なお、作品自体は江戸時代のものです。

7 浄土宗の文化遺産

(1) 善光寺信仰

さて、これまで良忠と聖聡について話しましたが、そのお二方だけではなくて、浄土宗との関わりで千葉県にどんなような文化的な遺産があるだろうかということをご紹介したいと思います。レジュメの6ページでございます。

まず善光寺信仰ということでございます。善光寺信仰というのは、長野県に善光寺というお寺があるんです

けども、お参りに行かれた方はいらっしゃいますでしょうか。あそこは宗教法人としては非常に珍しく、天台宗と浄土宗が共同で管理しております。本尊が大陸のほうから献上されたということで、一光三尊といわれまして、一つの光背に阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩、この三尊が並んでいます。絶対秘仏で、誰も見たことがないですね。「善光寺の御開帳」がありますけれど、あの御開帳は御前立の御開帳なんです。本尊そのものは見たことがない。記録では鎌倉時代に一度開かれたといわれているんですけども、それは誰も立証できません。善光寺の御開帳というのは御前立の御開帳だということです。

善光寺の本尊は生身の如来、靈験仏として非常に信仰されておりまして、多くの模刻像というのが、そっくりさんですね、コピーがたくさんつくられます。つまり「それだけ靈験あらたかならば、その写しを頂いて自分のところで安置すれば、さらに御利益があるだろう」ということで大いに普及します。鎌倉幕府を開きました源頼朝もこの善光寺復興を支援しまして、自らも参詣しております。この参詣のときに、千葉氏からは相馬師常、千葉胤正、千葉常秀が従ったと記録に残っております。

千葉県で伝道しました然阿良忠は、房総に来る前に信州の善光寺に参詣、逗留しています。48日間講義を行ったといわれておりまして、それが良忠の弟子の道光が著した『然阿上人伝』（弘安10年（1287）成立）に記録されております。

千葉県に残る「善光寺式阿弥陀三尊」の一例として、香取市の修徳院にある善光寺式三尊があります〔『ふさの国の文化財総覧 第二巻』（千葉県教育庁教育振興部文化財課、2004年、135ページ参照）。本来は舟形の光背があるんですけども、今は光背を失っています。阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩とあります。善光寺式三尊は基本的に銅像ですね。木像のものもまれにありますけども、銅像で高さは大体40センチ前後ぐらいです。小さいです。善光寺式三尊の特徴として、二つの脇侍が手を重ねているような形をしています。これが特徴です。「千葉県内善光寺式阿弥陀三尊像」【史料19】として一覧を載せていますけれども、千葉県には全部で四十いくつだったかな、全国的に見てもかなりの数の善光寺三尊仏が残っております。

全国善光寺会というのがありまして、全国に善光寺という名前、あるいは新善光寺、そういった名前を持っているお寺が全部で119カ寺もあるそうです。そして、善光寺式三尊といわれる、模刻像だといわれているものが全国で443、かなりの数ですよ。それだけ普及したってということで、非常に厚い信仰が広がったということが分かるかと思います。千葉県でも40ぐらいありますので、かなりの数だと思います。

善光寺というのは善光寺聖によって教えが広まるんですね。善光寺仏、先ほど言いましたけども像高は40センチぐらいですから、笈に背負って経巡るわけですね。それで結縁を受けると。ありがたいものですよ、この善光寺さんはということで、「生身の如来で、これを拝めばあなたも往生できますよ」ということで、そういった聖の人たちが教えを広めたといわれております。先ほどの然阿良忠が千葉県に来る前に善光寺にも寄ったということもあるし、いろいろお金を持っていたということもあるので、おそらくこういった聖のような勧進の活動をされていたのではないかと思います。

その一つの傍証なんですけれども、福島県いわき市にある旧如来寺というところが持っている善光寺式三尊は、良忠の弟子の真戒という方が弘安10年（1280）に授かったもので、それをまたその弟子が福島県に行って浄土の教えを広げたときにこれを安置したというような伝えがあります。ですから、もしかしたら良忠自身も善光寺聖のように、例えば笈で担いで経巡ったというようなことがあったのかどうか、一つのこれは説になりますけども、そういったことがいわれております。

先に見た【史料13】の後半で、然阿良忠が千葉県を離れて鎌倉に行った際に大仏の浄光聖のところに行ったと書いてありますが、これは市原市の満光院というところにある善光寺式三尊の阿弥陀像の銘文に見える浄光のことだといわれております。背面に字が彫ってありますが、これに「浄光上人」や文永11年（1274）の年号が出てきます。

この浄光上人が、先ほどの鎌倉にいた浄光聖と同一人物だろうといわれております。この浄光というのは、皆さんご存じの鎌倉高德院の鎌倉大仏ですね、あれを造るときに全国を経巡って勧進して喜捨を集めた聖、それが

浄光聖です。その方のお世話になって鎌倉で住まいを見つけるといふ然阿良忠上人ですから、当然浄光聖との付き合いの中で、然阿良忠も勸進あるいは聖的な活動をされていたのではないかというようなことがいわれております。

(2) 仏画と法会

①十王図

レジュメ7ページの「^{ほうえ}仏画と法会」というところに移りたいと思います。まずは「十王図」という仏教絵画になります。講義の初めに『往生要集』、「厭離穢土欣求浄土」と言いましたけれども、この教えをいろんな意味で絵画化する、立体化するといふ行為が行われます。絵画化するといふのは、このように地獄の陰惨さを描くため、その一つが「地獄図」あるいは「十王図」といふものになります。

十王の説明については、レジュメに書いてありますので、後でご覧いただければと思います。一番有名なのが1から10まである王様のうちの5番目、閻魔大王ですね。閻魔様が5番目になります。つまり、亡くなった後から初七日、二七日、三七日から七七日のこと、七日ごとの供養のときにこの十王図を掛けて回向をすれば、迷わずに地獄に行かなくてもいいとされます。最後10番目、三周忌ですね。三周忌のときに最後の五道転輪王といふところで全部追善供養をやれば、地獄に行かずに極楽に行けるといふようなことを示すために掛けられる絵でございます。

その例として匝瑳市の西光寺にある「^{けんぼんちやくしよくじゅうおうず}絹本著色十王図」[前掲『ふさの国の文化財総覧 第二巻』、20ページ参照]がございます。例えばこの亡者なんかは、おなかのところから内臓が出てしまっているような絵が描かれてあります。また、首かせ、足かせをされて鬼に痛めつけられているといふような様子が描いてありまして、王様は中国風のお姿をしていて、この亡者が生前どんな悪いことをしたかといふことを判定する立場の人ですね。脇に仕えている陪審の者たちがいて、帳面みたいなものを持っていますので、ここには生前の行いが書いてあるといふようなことがいわれております。閻魔様のところを見ると、その前に鏡、^{じょうはり}浄玻璃の鏡があって、これに生前行った悪行が映し出されるといふような絵が描かれています。このような特徴的なものが「十王図」です。これを所蔵する西光寺は真言宗のお寺でございます。真言宗ではこういった十王図といふのはめったに掛けませんので。もともとこの「十王図」は、レジュメのほうで書いてありますけれども、西光寺の近傍の善導寺にあった、廃寺になった善導寺の所蔵だったと伝えられています。善導寺といふのは当初は浄土宗で、15世紀前半に密教化したお寺といふようなことになっております。善導寺のあった跡といふのは、先ほど然阿良忠がいろいろなところで教えを垂れていた、講義をしたといふところの、まさにそこなんですね。

然阿良忠だけではないでしょうけれども、浄土宗の普及によってこういった地獄・極楽に関するような仏教的な絵画も千葉県に持ち込まれているといふようなことが、大きな文化遺産の一つではないかと思っております。この絵図は、中国の宋の時代に^{りくしんちゅう}陸信忠といふ有名な絵師がいるんですけれども、その方の絵柄を日本でまねて描かれたものといふことで、鎌倉時代後期の製作といわれております。本県では最も古い「十王図」になります。

②行道面

仏画のお話をしましたけれど、次は法会のお話になります。皆さまご覧になったことあるでしょうか。横芝光町の広濟寺といふお寺で、毎年8月16日かな、お盆のときに行われる「^{きらいごう}鬼来迎」といふお祭りです。「鬼が来る、迎える」と書いて「鬼来迎」と読むんですけども、国指定の重要無形民俗文化財でございます。仮面をかけた仏教劇でして、全国でも極めて珍しい劇でございます。[前掲『ふさの国の文化財総覧 第二巻』、11ページ参照]。

構成は、「大序」、「賽の河原」、「釜入れ」、「死出の山」といふ四つの構成でストーリーが作られてありまして、「大序」のときに閻魔大王と閻魔大王に仕える鬼が登場します。閻魔大王の脇で記録を取る^{くしゅうじん}俱生神といふ者がいるんですけども、これが登場します。そのときに^{たつえいば}奪衣婆といふ者が登場するんですけども、奪衣婆は仏教では^{さんず}三途の河原のほりにありまして、今まさに亡くなった方が三途の川を渡ろうとするときに亡者が着ている服を剥ぎ取って、はかりの機能を持っている木に掛けるんですね。そうすると、生前行った悪行がひどければひどいほど

衣が重くて木が垂れ下がると。その垂れ下がりを見て「おまえはこれだけのひどいことをしたんだ」というようなことで、「地獄に行け」というようなことを言い渡す役割をするのが奪衣婆という人なんですけども、現地では鬼婆と言われてます。

この次は「賽の河原」ということで、子どもたちが、これ亡者です、頭に三角をしていますけども、石を積むんですね、賽の河原で。「一つ積んでは親のため、二つ積んでは」ということです。これは亡者が、自分たちは生前そういった先祖の供養をしなかったから地獄に落ちるんだということで、賽の河原で親のために供養するというので石を積むんですけれども、そこでまた鬼が登場して積んだ石をばっと全部崩してしまう、また一からやり直す、永遠に終わらないというような、そういったことが仏教のいろんな説話の中で出てきます。そのときに地蔵菩薩が出てきて鬼を追い払ってくれます。これが二幕目になりますね。

三幕目は亡者が釜ゆでにされています。釜ゆでの刑ですね。釜ゆでにされていて、鬼が首でも切って食らおうかというようなことで、亡者を釜に入れて追い立てます。そういったシーンが上演されます。

最後は「死出の山」というところで、亡者が鬼に責め立てられているところに観音菩薩が登場して亡者を救ってくれるという、そういうような仏教劇ですね。1時間ぐらいかけて上演されるんですけれども非常に珍しくて、全国からこの日だけは、横芝光町の虫生^{むしゅう}という地区なんですけども、大勢の方が見学に来られます。

これはいわゆる地獄・極楽の様子を再現して、そこで仏が登場して救ってくれるという、そういったことを教える劇なんですけども、実はこういった劇は全国でいくつか残っています。近いところでは東京世田谷区の浄真寺、九品仏として知られるところなんですけども、観音様の仮面をかぶった輪っかの光、頭光をつけて橋、行道を渡ってくる劇「二十五菩薩来迎会」があります。

先ほど「當麻曼荼羅」で説明した奈良県の當麻寺でも、このように菩薩の衣装も着て迎えに来るさまを再現する劇があります。岡山県の弘法寺^{こうぼうじ}は非常に珍しく、仏様の姿がありますね、これ着ぐるみなんですけども、木でできた仏様になっています。中が空洞になっていてかぶるんです、全部を。まさに阿弥陀様がお迎えに来たんだというのを再現する劇です。長野県の十念寺にも同じような劇があります。先ほどの千葉県の「鬼来迎」ももとはといえばこういった劇でして、どっちかという地獄の様子が強いんですけども、そのほかいろんな劇があったんですが、今は死出の山で終わる、そこまでしか上演されていませんけども、本来ならこのように仏が救ってくれるところまでをビジュアルにといいますか、非常に演出をもって表現されるといったものでした。

これを仏教では「迎講^{むかえこう}」とか「練供養^{ねりくよう}」なんていう言葉でいいます。そういうところに伝わった、このような仮面がよく残っています。

その仮面が、実は千葉県にはたくさん残っております。レジュメ7ページの表を御覧ください。今言った「鬼来迎」には閻魔大王、亡者、鬼の面もあります。「鬼来迎」の面は全部で13面残っていて、そのうちのこの3つが室町時代までいくだろうといわれている古い面になります。今はこの13面を使ってはおらず、昭和になってから新しくなったもの、再現したレプリカで上演しています。非常に貴重なものです。

千葉県でこういった劇が上演されるのは横芝光町ですけども、かつてはもっと上演されておりました。その一つが香取市の浄福寺、旧小見川町ですね。これも先ほど然阿良忠のところで紹介しましたように、このお寺はまさに開山が然阿良忠です。ここには鬼もありますし、牛頭・馬頭^{ごず・めず}もありますし、観音のお面とかいろいろありまして、全部で30の面があります。閻魔大王、罪人、俱生神、奪衣婆、懸衣翁、牛頭・馬頭とかいろいろあって、そのほかの衣装、天蓋とか金銅幡とか台本、そういったものが残っています〔前掲『ふさの国の文化財総覧 第二巻』143ページ参照〕。明治の初年に上演されたのが最後で、今はもう上演されていません。

次が鴨川^{しんがんじ}の心巖寺というお寺です〔『ふさの国の文化財総覧 第一巻』千葉県教育庁教育振興部文化財課、2004年、94ページ参照〕。ここも然阿良忠が開いたといわれているお寺です。全部で菩薩面が21、比丘の面が2つ。ここは面だけで、装束などは残っておりません。台本も伝わっていません。古いものは室町時代からの面が含まれています。心巖寺は今では鴨川の港の近くにありますが、もともとは鴨川一番北のほうの北風原^{ならいばら}というところですね、山奥のほうになりますけども、そこに創設されたということで、今こういった面を伝えておりま

す。

次が成田市、旧下総町の迎接寺こうしやうじというお寺です。ここもお面がありまして、大正5年(1916)の上演が最後でございます。鬼の面が5面、幽霊の面とかが8面、さらに衣装が伝わっています〔前掲『ふさの国の文化財総覧第二巻』、76ページ参照〕。ここはもともと浄土宗のお寺で、現在もそうです。縁起では、『往生要集』を著した恵心僧都源信がこの地に住んでいて、夢で感得かんとくした仏様がやっぺらっぺらそのさまを法会によって再現しようとして、この面を自ら彫ったというように伝えております。

次が旭市の光明寺、旧干潟町。光明寺は然阿良忠と付き合いのあった鍋木胤定が開いたお寺で、今廃寺になっています。ここも面だけしか残っておりません。次が君津市の建暦寺けんりやくじというお寺です。然阿良忠を支援した在阿弥陀仏、三経寺というお寺を紹介しましたが、そこはちょっと距離が離れています。ここの面は、今までいろいろご紹介しましたが古くても室町だったんですが、この2面は鎌倉のもので、非常に貴重なお面でございます〔『ふさの国の文化財総覧 第三巻』千葉県教育庁教育振興部文化財課、2004年、178ページ参照〕。建暦寺は現在は真言宗ですが、縁起では行基菩薩が開山になっています。鎌倉時代の執権の北条氏から建暦、年号ですね、年号を頭にした寺号を頂くというのは非常にまれなんですね。執権の力によって建暦の年号を頂いた寺を名乗ることができたといわれています。ここは然阿良忠となんの関わりもなく、浄土宗とのつながりもないんですが、ここには干体仏という小さな仏様が干体祀られておりまして、それを恵心僧都源信が彫ったというようにいわれています。そういったつながりがあるということでございます。

このように県内に、「練供養」ですとか「迎講」に使うはずである行道面がたくさん残っているというの、やはり然阿良忠をはじめとした浄土宗の関係の遺産であろうと思われま。確かに仏教の教えそのものよりは、その周辺にまつわるいろいろな文化、伝承といえますが、そういったものが形として残りやすいものですから。本来の教えからは変わったところもありますが、今でも上演されている事例もあるように、非常に地元でも大切にしてきたということを今日はご紹介したいと思ひました。

おわりに

さて、浄土宗の西誉聖聡をはじめとして、その弟子の酉仰ゆうこうまで説明しましたが、ほかにも浄土宗と千葉氏の関係では見逃せないものがあります。例えば生実おゆみ(千葉市中央区)の大巖寺ですね。これは原胤榮たわよしが道誉貞把に帰依して創建したもので、江戸時代には関東十八檀林の一つになります。あと、松戸市郊外の東漸寺とうぜんじ。これは高城氏ですね。文明13年に愚底が開山したものです。これも関東十八檀林の一つということで、江戸時代はこの大巖寺と東漸寺は、いろんな学僧もいますし全国から修行僧も入ってくるという、大学のような場所でもございました。このように浄土宗の一つの宗派だけを取って見て千葉氏のことを今日は話させてもらいましたが、有名な僧侶以外にもいろんな方たちの業績もあります。石造物を研究されている方でしたら、徳本上人という方をご存じかと思うんですけども、江戸時代に全国を回って南無阿弥陀仏という石塔を建てた徳本上人、千葉県内にもいろいろなところを回って石塔を建てております。そういったこともありますので、仏教の教えだけじゃない、そういった文化的な遺産を含めても浄土宗の関わりは決して見逃せないものがあると思ひます。

最後ですけども、実は令和5年というのは仏教にとって非常に大事な年になっておりまして、例えば真言宗では弘法大師御誕生1250年、浄土真宗では立教開宗800年。立教開宗というのは、いわゆる親鸞聖人の主著であります『教行信証』きやうぎやうしんしやうが書かれた年から800年たったというようなことでもございます。日蓮宗では身延山開創750年。今まで申し上げました浄土宗は、来年が浄土宗開宗850年ということになっております。

何を申し上げたいかといひますと、こういった記念の年というのは宗教界が総力を挙げて、いろいろな行事と申しますか、慶讃法要などを行います。それとは別に、やはりこういった節目の年には「もう一回宗祖に還れ」というようなことで、改めて研究が深まるんですね。私は親鸞聖人の立教開宗800年の研究グループに属してはいますが、こんなときにいろんな研究をやって、例えば宗祖親鸞はどうだったのかとか、宗祖法然はどうだったのかということで、改めて人間像とか、その周辺の歴史的な事実を掘り起こす作業が全国的に展開されます

ので、仏教を学ぶ者にとっては非常に大事な行事が続くなというように考えております。

もともと千葉市からのご依頼では、千葉氏との関係ということで、それを深める立場でということでお話を頂いたんですけども、私はもともと歴史学の立場から仏教の歴史を見ていきたいなと思っいろいろなことやっています。皆様のお役に立てたかどうか分かりませんが、私の話はこの辺で終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

◆司会

それでは以上で植野先生の講演を終了させていただきます。先生、ありがとうございました。では、ただ今か休憩とさせていただきます。その後で、会場より頂いた先生へのご質問にご回答いただきます。後半の内容で質問があるという方はなるべく早くご質問を書き添えて、どのご質問にご回答いただくかというのを選定し、回答の内容を考えるお時間も必要でございますので、早めに受付へ質問票のご提出をお願いいたします。

【休憩】

◆司会

大変お待たせしました。講座を再開いたします。それでは、会場の皆さまから頂きましたご質問について、植野先生からご回答いただきます。

◆質問

千葉氏といえば妙見信仰がありますが、それに求めるものと仏教に求めるものの違いは何でしょう。千葉氏によるほかの信仰対象、妙見信仰と浄土信仰との関係はどのようなものと考えられるでしょうか。

◆植野

さすが千葉氏に関する講演ということで、専門的なご質問だと思います。まず、妙見信仰というのは千葉氏に特徴的な信仰だということでだいぶ知られてきておりますけども、妙見信仰はいろんな史料の中で登場するときに、戦を勝利に導く神ということで、そういう存在として祀られているということはお存じかと思ひます。ですから、妙見信仰に求める千葉氏といえばやっぱりそういった戦の勝利ということと、妙見寺で妙見堂を祀った後、その前で一族の絆を深めるような法会を毎年行うということもありますので、そういった一族の精神的な紐帯としての役割、その二つがあるかと思ひます。

一方、浄土宗のほうはやはり極楽往生、それに向けてどのように努めればいいのかという本当の往生への信仰ですね、それに関するものとして、武士の間で伝わっていったのではないかというようなことで大きく分けていいと思ひます。

◆質問

千葉宗家の孝胤^{のりたね}の墓は海隣寺で時宗、勝胤の墓は勝胤寺で曹洞宗、武石胤盛は真蔵院で真言宗、武石胤重は胤重寺で浄土宗ということで、一族でも宗派はばらばらで、親子でも異なるということは、この時代は先祖代々の宗教という考えではないのでしょうか。どういった宗教観だったのでしょうか。

◆植野

日本の仏教はよくこんなふうにいわれます。奈良時代とか平安の初めの古代仏教は国家仏教だと。中世、戦国時代とかになると一揆の問題とかがあつて民衆仏教だと。近世、江戸時代になると寺檀制度、本末制度が出てきて葬式仏教だというように、大きく分けてよくいわれるんですけども、最近はこの見方は改められつつあ

ります。家として、氏としての仏教というのはいつごろからということになりますと、これはまたいろいろ地域差とかもあります。では、千葉氏の菩提寺はということで、今ご質問された方もあったように、いろんな宗派が入り乱れていますので、完全に家の宗教というのが固定化されるのは江戸時代になってからになります。それ以前は個人の信仰もありますし、家の中でも本家と分家の信仰もまた違ったりしますので、そういった多面性があるということでご理解いただければいいかと思います。

◆質問

千葉氏と関わりのある浄土宗寺院の考古学的、建築学的な遺構にはどのようなものがありますでしょうか。

◆植野

先ほど御紹介しました、例えば上野国の藺田ですけれども、邸宅の中に阿弥陀堂を建てているとか、こういった事例があって、その場所が特定されて発掘すれば、当然阿弥陀堂の遺構などがあると思うんですけれども、私の知る限りでは、千葉県の中でそもそも武士の居宅の発掘自体がまだそんなにないということもあるということと、阿弥陀堂があって阿弥陀堂の周りに池があるとかですね、京都の宇治平等院、有名な世界遺産がありますけれども、あれは平安時代の摂関家であった藤原氏が建てた、まさに浄土教思想の精髓みたいな建築物ですけれども、池に臨んで建物があってその本尊として阿弥陀如来を安置すると、そういった遺構は関東ではいくつか検出されていますが、千葉県ではまだ検出されておられません。まして、これが完全に浄土式庭園の形をとどめたものというのは残念ながら分かっておりません。申し訳ございません。

◆質問

相馬師常や東胤頼は、1207年の法難のときにはどう過ごしていたのでしょうか。また、1211年以後は何をしていたのでしょうか。

◆植野

まず相馬師常については、【史料1】の『吾妻鏡』の一文、今日は講演の中で読み飛ばしてしまいましたけれども、相馬師常は元久2年(1205)にもともと亡くなっており、建永の法難のときにはもういませんので、当然そういった事績はないということになります。東胤頼についてはいろいろな事績が分かっていますけれども、このときにどういう動きをしたかということについては実は分かっていません。

もう一つが、建永の法難と嘉禄の法難の間ということですが、これも実は分かってないんですけれども、ただ、法然の弟子だった宇都宮蓮生は発心してすぐ法然上人の教えを受けたいということで、大番役のときに京都に上ったときにすぐ法然を訪ねるんですが、法然はもう流罪になっていて京都にいなかったの、法然は土佐の国に流罪になるんですけども、実は土佐の国に行かずに途中の兵庫県の勝尾寺という寺でしばらく滞在するんですが、そこに向かうんですね。京都に法然上人はいないということで、流罪になった先まで訪ねようという、これもすごいエネルギーだと思います。大番役を放っておいて、そんなことやっていいのかなと思いつつ行くんですけども。そうしたら法然上人は「自分はもう年老いて、こういった流罪の身でもあるので、私はあなたに教えることはできない。私の弟子の証空っていうのが京都にいるので、その人に弟子入りしなさい」と言ったので、宇都宮蓮生は「分かりました」ということで、また京都に戻って証空の弟子になります。最後まで証空の看取りまでやって、それにかかる寺も整備して、そこが宇都宮家のお寺の家になるというようなことになるんです。そのように、当時、東胤頼が大番役でもし京都に行ってそのようなことに巻き込まれれば、今の宇都宮と同じような業績が分かるんですけれども、残念ながらそこは分かってないということでございます。

◆質問

史料の2ページ、3の3の「帰依の理由」からすると真宗のほうに武士にはなじみがあると思います。なぜ千葉氏は真宗ではなくて浄土宗なのでしょうか。真宗は悪人こそが救われるとっておりますので、そちらのほうになじみがあるのでは。

◆植野

まず悪人こそが救われるというのは、浄土真宗の親鸞の弟子の唯円が書いた『歎異抄』というところに出てくる言葉です。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」ということで出てきますけども、この悪人こそが往生になるというのは、実は親鸞のオリジナルではなくて、法然も言っておりますし、さらに法然の前の天台浄土教の中でもそういわれております。特に末法の中では悪人しかいないと、衆生は。その者こそが救われるんだということを、仏教界は盛んにその教を説くんですね。それをより先鋭化させたのが法然であり親鸞であったというふうに捉えてよろしいかと思えます。

確かに親鸞の弟子というのは、親鸞の弟子の名前が入った名簿みたいなのがたくさん残っているんですけども、ほとんどが武士です。親鸞の門弟はほとんどが武士です。では法然の門弟はというと、今日は全然説明しませんでしたけども、当時の摂政関白であった九条兼実とか、比叡山の座主を兼任したような方とか、比叡山の学僧とか興福寺の学僧とか、お坊さん、俗人かかわらず、法然はいろんな階層の人たちを弟子にしています。今日はたまたまその中の武士の、特に関東に限ったものだけご紹介させていただきました。そういうわけで、親鸞の教えのほうになじみやすかったのではないかということではないかと思えます。

ただ、親鸞は茨城県に来て約20年間伝道して教を普及しますが、千葉県には実は立ち寄ってはいないんですね。伝説ではいくつか千葉県に立ち寄ったというのがありますけれども、それを同時代の史料で確認することはできない状況でございます。

ですから、武士が自分と現実のはざまの中で様々な悩みを抱えたときに、いろんな方に教を乞うと思うんですけども、今まで真言の教えだったのも法然の教を受けてすぐその場で発心して専修念仏者になったという話は、法然上人以外でもいくらでも出てきます。それは親鸞の浄土真宗でも同じです。ほかの日蓮宗とかでも、実はそれともたくさん出てくるんですね。その時々教を乞う側の心の問題とか当時の社会情勢、いろいろあると思いますので、一概に武士だからこう貴族だからこうっていうのはないかとは思っております。

◆司会

ありがとうございます。非常にたくさんのご質問皆さんから頂いておりますが、すいません、お時間の関係で次で最後の質問とさせていただきます。ご了承くださいませ。

◆質問

浄土信仰の中で時宗、時の宗と書く時宗と千葉氏の関係について簡単にお教えいただきたいです。

◆植野

時宗のことについても私いくつか研究させてもらったことがあるんですけども、よく分かってないんですね。というのは、時宗を開いたのは一遍という人なんですけども、今日お話しした法然よりもずっと後で、然阿良忠さんよりも約20年ぐらい後の人です。日蓮さんよりもちょっと後ぐらいの人なんですけども。この方、遊行^{ゆぎょう}ということで全国を回って、「踊り念仏」という言葉をお聞きになったことがあると思えますが、「南無阿弥陀仏」を唱えながら踊るんですね。法悦に入るというんですけども、阿弥陀様の教を唱えることによって、その喜びでついつい踊ってしまうんだということで、踊り念仏ということを普及する方なんですけども。その踊り念仏の一遍は、鎌倉とか陸奥国とか、この辺だったら下野国とかいろいろ立ち寄るんですが、下総、上総には実は立ち

寄っていません。一遍の亡くなった後、二祖は他阿^{たあ}という人なんですけれど、他人の他に阿弥陀仏の阿と書いて他阿といいますが、他阿上人の代になって初めて千葉氏との関係が少し出てきますけれども、それ以外は分かりません。

また、一遍が生きていた時代に一遍の業績をまとめた国宝の『一遍聖絵』という絵巻物がございます。今日館長の話であった藤沢の遊行寺に保管されている国宝ですが、そこに上総国から生阿弥陀仏という者が訪ねてきたということで、それに対して一遍が教えをするということがあるんですが、生きる阿弥陀仏と書いて生阿弥陀仏なんですけれども、この生阿弥陀仏がどういう人物であったか、それも残念ながら分かっておりません。また長南道場、いわゆる長生郡長南町の長南ですね、長南道場で他阿上人が念仏をしたというようなこともできます。そうするとこれはどこかなという、実は長南町には時宗の寺は1カ寺もなく、浄土宗の称念寺というお寺が今はあります。そこには本堂のところに初代「波の伊八」の大きな龍ですね、龍の彫り物があるお寺なんです、称念寺です。今、宗派とかそちらよりも伊八のほうで有名になっていますけれども、そこはもともと時宗だったという寺伝がありまして、おそらくそこが時宗の長南道場の後身の場所であったらうといわれています。

その本尊は非常に有名です。本尊の阿弥陀如来は「齒吹如来^{はぶきによらい}」といいまして、齒が生えている如来様なんです。先ほど生身^{しょうじん}の如来ということで善光寺阿弥陀仏を言いましたけれども、生の身ですね、生身ということになります、その生身をリアルにするのにいろんな手法があります。例えば、目を玉眼にするというのも一つです。齒を出すとか、爪をわざと出すとか、そういったより人間に近くする、今もまさに生きてるんだというようなことを表すのに、そういった異相といいますが、異なった相を仏様に付与するんですけども、この長南の称念寺の阿弥陀様は「齒吹如来」ということで、大変な生身の如来として江戸時代に人気を博して、全国から参拝客が来ます。

そういったことはあるんですけども、時宗としてやはり一番大きなのは、時宗の七代託何^{たくが}という遊行上人が千葉県の上総国から出ているということです。あとは、神奈川県相模原市にある當麻寺の歴代の能化が千葉氏からいくつか出ています。それは室町の終わりごろになってからの話になりますけれども、そういった話があります。簡単ですが、以上です。

◆司会

ありがとうございました。いつまでも先生のお話聞いていたところではあるのですが、すいません、お時間となりましたので、以上で植野先生の講演を終了させていただきます。先生、どうもありがとうございました。

◆植野

どうもありがとうございました。

(拍手)